

令和 8 年 3 月 宝塚市長定例記者会見

日 時 3 月 24 日(火) 11 時 00 分から 場 所 特別会議室

出席者 (市) 市長、副市長、企画経営部長、企画経営部次長、企画経営部課長、企画経営部 市立病院経営改革担当部長、市立病院経営改革担当次長、市立病院経営改革担当課長

出席者 (ゲスト) パナソニックホームズ株式会社

出席者 (記者クラブ) 朝日新聞社、神戸新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

1 発表案件

(1) 公民連携のまちづくり「中山台エリアプラットフォーム」を設立します

(企画政策課)

【質疑】

(記者) 子育て世代を中心に「20 年後のニュータウンのあり方」について議論を行ったということですが、具体的にどのような年齢層の方が参加されたのでしょうか。

(ゲスト) 主に 20 代から 40 代の子育て世代を対象としました。実際にお集まりいただいたのは 30 代の方が中心でした。

(記者) 全体の割合で見ると、他のニュータウンと比べて、子育て層は少ないのでしょうか。

(ゲスト) 平均的な地域と比較すると、少ない方だと思います。

(記者) 議論の場で、具体的にどのような意見が出たか教えてください。

(ゲスト) まずは中山台ニュータウンの良い点について話し合っていた上で、不足している点についてもご意見をいただきました。例えば、「人が集まる場所が少ない」という意見や、「夜間は暗い場所が多く、近距離であっても送迎が必要で、子育て世代にとってその負担が非常に重くなっている」というお話も出ていました。公園に関しても「より魅力的な場所になってほしい」という要望や、特に「子どもたちが集まれる場所が少ない」という意見を多くいただきました。そこで、世代を問わず様々な方々に集まっていただく広場として「ログボート」と名付けた拠点を整備いたしました。実際、3 月 15 日のお披露目以降、お子さんが遊んでいたり、お子さん連れの方が買い物の帰りに立ち寄りする姿が見受けられます。一方で、我々が保有する商業施設「ファミリーセンター」にはコープが入っておりますが、子育て世代の多くは車で移動される

ため、わざわざここへ立ち寄ることが少ないというお話もありました。現状では「買い物だけが目的」の場所になっているため、それ以外の目的でも来れる場所に変えてほしいというご意見です。若い方々が気軽に立ち寄れるようなお店があれば、そこへ行く目的が生まれるのではないかという方向性が見えてきました。今後は、ここを皆さんが集まれる拠点として整備していく方針です。

「気軽に立ち寄れる場所ではない」というご意見は、我々にとって厳しい指摘ではありますが、これを真摯に受け止め、今後の計画に活かしていきたいと考えています。

(記者) ファミリーセンターは、町内からのアクセスという点では便利な場所にあるのでしょうか。

(ゲスト) 普段は買い物のための「買い物バス」という循環バスが運行していますが、基本的には皆様お車で来られます。無料駐車場を完備しており、エリアの中央に位置しているため、アクセス自体はしやすい場所だと考えています。ただし、ご高齢の方にとっては坂道を登る必要があったり、自転車でも坂道の影響でアクセスしづらかったりする側面があります。インフラとしてのアクセスは確保できていますが、徒歩や自転車での利便性には課題があるのが特徴です。そこは改善していきたいと考えています。

(記者) 「プラットフォーム」という言葉は日本語でどのように説明すればよいでしょうか。

(ゲスト) 日本語への直訳ではありませんが、目的や役割としては「協議体」と捉えていただければと思います。

(記者) アドバイザーを務めている武庫川女子大学の三好教授は、どのような経緯で参画されているのでしょうか。

(ゲスト) 三好先生はニュータウンに関する著書も多く、特にニュータウンの歴史やコミュニティのあり方について深く研究されています。企業や自治体、そしてそこに住む住民の方々との関わり方や課題についても知見をお持ちです。今回のプロジェクトを作成するにあたり、多角的なアドバイスをいただいています。例えば、当初我々は「ニュータウンの再生」という言葉を使っていました。しかし先生からは、「再生」という言葉は今住んでいる方々にどう受け止められるか、という視点での助言をいただきました。

(記者) 「再生」という言葉を、現在はどのような言い方に変えられているのでしょうか。

(ゲスト) 現在は主に「生生発展 (せいせいはってん)」という言葉を用いております。

「生きる」という字を2つ並べた造語としての側面もありますが、「絶えず新しく成長し続ける」という意味を込めています。

(記者) 学習塾のバスについて、2026年度中に活用するスケジュール感でしょうか。

(ゲスト) 学習塾のバスというより、現在あるリソースの中で非効率に運用されている部分を効率化し、そこで余ったリソースを回すという考え方です。現在、サービス提供事業者と協議を進めている段階ですので具体的な名称は控えさせていただきますが、お子さんの送迎に特化した専門サービスがあります。タクシー事業者などと連携しながら、まずは需要がどの程度あるのか、その事業性を図っていきたいと考えています。

(記者) イメージとしては、タクシーを利用するような形でしょうか。

(ゲスト) そうですね。タクシー運転手に協力していただくイメージに近いです。車両については、デマンド型のバスなどを想定していますが、利用者の数を見極めた上で最終的に決定していく予定です。

(次頁あり)

(2) 医療・福祉・介護・保健に係る「たからづかモデル」検討報告書（令和7年度版）
を公表します

（企画経営部 市立病院経営改革担当）

【質疑】

（記者）健康センターの仮設移転先について伺います。市役所敷地内が候補地ということですが、広場は今後貸し出しを行う方針を決めていると思います。仮設建物を建てることで貸し出しに支障は出てこないでしょうか。あるいは、別の場所を想定されているのでしょうか。

（市長）現時点で敷地内での候補地として検討しているのは、公用車駐車場か、以前上下水道局の仮設庁舎が建っていた場所のいずれかです。ただし、これも検討の途中段階の案であり、建物の規模を含めて現在再検討を行っている最中です。仮設が必要となった場合でも、できるだけコンパクトな規模に抑えたいと考えております。

（記者）新病院について伺います。以前、全室個室化はなかなか難しいというお話を伺った記憶があるのですが、今回「全室個室化」という方針が示されました。方針転換の理由を教えてください。

（担当）もともと全室個室化にしたいという思いはありましたが、空間的な制約という課題がありました。今回、「たからづかモデル」の検討の中で、健康センターを先行して移設する方向性が出ています。健康センターがないという前提で設計できるようになったため、空間的な余裕が生まれたことが大きな理由です。

（記者）その他にも、新型コロナウイルスの経験から感染症リスクを考慮して、4人部屋や6人部屋よりも個室化が望ましいという考えも背景にあるのでしょうか。

（担当）おっしゃる通りです。感染症対策、あるいは性別によるベッドコントロールの不便さを解消できるメリットもあります。現場の看護部や病棟職員にヒアリングを行っても、全室個室化を望む声が圧倒的に多いのが現状です。

（記者）現在の病院に比べて、全室個室にすることで全体の病床数が少なくなるのではないかと思うのですが、概ねどの程度の病床数を備える予定でしょうか。

（担当）現在、最終的な数を精査している最中です。7月頃に「新病院整備基本計画」のパブリックコメントを実施する予定ですが、その中で、最終的な数字をお示ししたいと考えています。

（記者）経営効率を考えると高い病床稼働率が求められると思いますが、緊急時の余裕

などはどのようにお考えですか。

(担当) 平常時は、稼働率を上げていくことが経営的に効率的ですが、一方で、感染症対策などの緊急時には運営フェーズを切り替えて対応することになります。可能な限り対応エリアもしっかりと設けながら、危機管理と経営効率を両立させていく方針です。

(記者) 「たからづかモデル」の検討枠組みについて伺います。来年度以降、より具体的に検討を深める段階において、各分科会の規模や目標設定などのスケジュールを教えてください。

(担当) 来年度からは「たからづかモデル担当部長」を新たに配置し、その部長を筆頭に推進する体制を整えます。懇話会は2年任期でお願いしておりますが、詳細な体制については来年度の新体制の中で決定していくべき事項であるため、現時点での回答は差し控えさせていただきます。

(市長) この1年間、懇話会と庁内検討会で課題整理を進めてきました。特に最優先課題である「病院の機能と施設整備」について整理を行ってきたことで、新病院整備計画を立てられる段階に至りました。来年度以降もこの枠組みは維持する考えですが、個別の課題解決に要する期間はそれぞれ異なります。民間事業者や市役所本体との連携など、時間を要するものも含まれます。ただ、来年度から「たからづかモデル担当部長」を置くことで、新病院の建設準備と、各分科会での課題整理を並行して加速させていく体制を構築いたします。

(記者) 市長の「たからづかモデル」に対する意気込みが人事にも表れていると感じます。今年度のステップを経て、来年度はさらに体制を強固にし、スピードアップを図るという思いでしょうか。

(市長) 今年度の最大の命題は、建築資材の物価高騰を背景に、できるだけスピード感を持って新病院の全体構想を詰めることでした。これは担当者の尽力により、予定通り進めることができたと考えています。一方で、昨年末にお話しした「宝塚福祉コミュニティプラザ」を中心とする福祉の拠点づくりなど、新たに対応すべき課題も増えています。財政面を考慮すれば施設全体を削減していく必要もあり、非常に複雑な方程式を解かなければならない状況です。そのため、今回の人事で新体制を構築しました。また、たからづかモデルの関連施設においてはこれまで担当の部署が異なりましたので、今後「たからづかモデル担当部長」のもとに集約しネットワーク構築を進めることで、課題解決をより一層強めてまいります。

(記者) 以前、医療・福祉・介護・保健の各専門家が意識の壁を取り払って一つにまとめるのは非常に困難ではないかと申し上げました。加えて、来年度からは市役所内部の部局間の意識の壁を越えてまとめていく必要があると思いますが、その点についてはどのようにお考えでしょうか。

(市長) ご指摘の通り、非常に困難な事業であることは間違いありません。しかし、今年1年間の課題整理を通じて、決して解決できない問題ではないという道筋が見えてきました。今後は「子ども」「高齢者」といった領域ごとに解像度を上げて検討を進め、ネットワーク構築の方向に進めるようになったと考えています。100%あるべき姿にいけるかは未知数ですが、この1年で課題解決に向かえるという自信は深まりました。

(記者) 新病院においても分娩の再開は行わないという方針でしょうか。

(担当) 現時点ではその通りです。

(記者) 市民の方々からは分娩再開への期待も大きいと思いますが、今後どのように対応されるのでしょうか。

(担当) 現在、市内には3つの産科クリニックがあり、分娩対応数は新生児数を上回っています。実質的に不便を強いられている状況ではありませんが、公立病院による安心感を求められていることは認識しています。来年度は、その方向性に向けて具体的にどのようなことができるのか検討してまいります。

(記者) つまり、新病院で分娩再開を行う予定はないが、市内3つの産科クリニックとの連携も含めて方策を考えていくということですね。

(担当) はい、おっしゃる通りです。

(市長) 市民の皆さんが市立病院で産科を行ってほしいと望んでおられる気持ちについては、市立病院そのもので産科を行うのではなく、市内の産科クリニックとの連携を通じて応えていけるのではないかと考えています。そのため、市民の皆さんの思いに応えられるネットワークづくりを強力に進めていきたいと考えています。

(次頁あり)

2 その他

【質疑】

(記者) 来年度の人事において、国際バカロレア教育を推進するためにどのような体制を組まれたのでしょうか。

(市長) 国際バカロレアに関しては、特別に人事を変化させる必要はないと考えています。今の担当の中で、中心となるのは学校の先生方です。組織をいじることよりも、まずは研究会などの枠組みを通じて、先生方自身が「国際バカロレアとは何か」「教育現場がどう変わるのか」を自分事として認識し、変化していくことが中心となります。教育委員会の組織そのものを変える予定はありませんが、退職者の補充など、委員会が本来の機能をしっかりと果たせるよう、全体的な工夫は凝らしています。

(記者) つまり、バカロレア教育を推進するための特定の部署の設置は行わないということですね。

(市長) はい、おっしゃるとおりです。

(記者) 今回の人事全体を通して、市長のカラーが出ているのはどのような点でしょうか。

(市長) 一つは、幹部職員に女性が増えることです。もう一つは、部長や次長の数が減っている点です。私は、市役所は「課長」が中心となる組織であるべきだと考えています。専門性を持ったチームリーダーである課長が、権限を持って主体的に業務を進める。そして次長が部局を越えた横のつながりを深めてプロジェクトを推進していく体制です。部長については、特定の分野の専門家というよりは、マネジメントの専門家として組織をまとめていただきたいと考えています。市全体の意思決定に携わる役員のような役割に近づけることが、今回の人事の狙いです。ただ、正直申し上げると、宝塚モデル担当部署ができたくらいで、特に目新しいことはないと思います。

(記者) 議会にて、ナチュラルスパ宝塚に関する債務負担行為（10年間・2億6,000万円）の予算案を撤回されましたが、その理由を改めて教えてください。

(市長) 複数の民間事業者と協議を進める中で、交渉を円滑に進めるための枠組みを作りたいという思いから提案したものでした。しかし、議会側からは「詳細が詰め切れておらず、市民への説明責任が果たせない」という厳しいご意見をいただきました。相手が民間事業者である以上、詳細を公開しにくい部分もありま

すが、説明不足という指摘は真摯に受け止め、今回は取り下げました。今後も民間連携の案件は増えていくでしょうから、市としてのコンプライアンスを守りつつ、どう連携していくかは継続的な課題だと認識しています。

(市長) 可能性がある複数の民間事業者と話をすることで、業者との交渉をしやすい状態を作りたいという思いから提案したものでした。しかし、議会側からは「詳細が詰め切れておらず、市民への説明責任が果たせない」という厳しいご意見をいただきました。それもそうなのかなという部分もわかりましたので、今回は取り下げました。一方で、今後も同様の案件は増えてくると考えています。宝塚市に限った話ではありませんが、民間事業者との連携や契約をどうするかということが、昔に比べると非常に大きくなってきていると思っています。とはいえ、コンプライアンスと言いますか、市として民間事業者との関わり方は、一定線を引かないといけない部分もありますので、そこは今後も似たような課題がたくさん出てくると考えています。ですので、致し方ないことだと思っています。

(記者) 今後、撤回した案を改めて出すことも考えているのでしょうか。

(市長) はい。可能性のある複数の業者とのサウンディング調査の延長線上としての話し合いを続けながら、6月議会を目標に、より詰めた提案をさせていただこうと考えています。

(記者) 新年度予算案に宝塚ハーフマラソンの運営補助金が計上されていませんが、今年には開催しないという認識でよろしいでしょうか。

(市長) いいえ、中止と決まったわけではありません。どのような形でやるかが決まっていなものは、予算として上げることはできませんので、現在、担当課、あるいは実行委員会でどんなことができるのか、これからのハーフマラソンはどうあるべきなのかということについて検証作業を進めています。そんな中で、大きな変化のないものでしたらできることになりまして、大きく変化するので一年の準備期間では難しいとなるかもしれませんし、大きな変化があるがその準備段階としてプロトタイプ的なことをやりますといった話もあり得ると思います。つまり、選択肢は複数ある状況なので、方向性が決まり次第、必要であれば補正予算で対応いたします。したがって、今年はやりませんと言ってるわけではなく、あくまでその可能性もあるという状況です。

(記者) 委員会のやりとりを聞いてみると、今年には開催しないというニュアンスに聞き取れましたが。

(市長) 一貫して申し上げているのは、昨年度と同じ形では来年度は実施できませんということです。来年度どうするか今検討中で、最終ゴールに応じて考えます、という状況です。

(記者) 新たな形が固まれば、補正で予算を出すこともあり得るということですね。

(市長) はい、そのとおりです。

(記者) 従来と同じコース、やり方では運営は難しいという認識なのでしょうか。

(市長) なかなかご理解いただくのが難しい部分もあるかと思いますが、これは単に予算額だけの問題ではありません。背景には物価高騰があり、それに伴って警備費用なども非常に上昇しています。むしろ問題は、行政が関わる事業としての『立て付け』にあります。例えば、市の一般財源から 500 万円を支出し、総事業費 3,500 万円の事業を実施するとしましょう。この場合、もし事業が完全に失敗して収益がゼロになれば、実質的に 3,500 万円の損失を生む可能性があるということです。市が 500 万円を出資し、実行委員会の事務局を市が担っている以上、もし 3,000 万円の赤字が出たとしても、実行委員会のメンバーがその責任を取れるわけではありません。最終的に市がすべてをカバーするとなれば、当初予算の 500 万円を大幅に超える 3,000 万円の追加赤字を背負うこととなります。しかし、自治体の『単年度主義』という原則上、そのような突発的な巨額赤字を補填することは不可能です。これまでは、事業費が 2,000 万円程度で推移していたこともあり、なんとかやりくりをしてリスクを表に出さずに継続してきました。しかし、背景にある事業費がどんどん膨らみ、さらに今回、雨天に見舞われたことでそのリスクが顕在化しました。市民の皆様から税金をお預かりしている立場として、この運営体制を維持するのは行政の仕組み上、非常に困難です。ハーフマラソンの価値や、5,000 人も参加者が集まる意義については我々も十分に認識しております。しかし、500 万円の支出に対して 3,000 万円もの赤字リスクを抱え続けることは、行政の立て付けとしてこれ以上は許容できない、というのが正直なところだと思います。

(記者) 三浦璃来さんへの賞などは検討されていますか。

(市長) その点については、現時点ではノーコメントとさせていただきます。何か決まれば、早急にお伝えいたします。

(記者) エフエム宝塚について伺います。市長のトーク番組に出演されましたが、市がエフエム宝塚サイドに一歩歩み寄った形なのでしょうか。

(市長) 関係がないわけではありませんが、次年度の予算が決まり、それによってエフエム宝塚側も予算が減り、減った中で番組編成をどうするかということが決まったので、できるようになった次第です。これまでは予算や編成の全体像が決まっていなかったため、お話をペンディングにせざるを得ませんでした。ようやく形が見えてきたため、今回実施できる運びとなったわけです。背景にある、エフエム宝塚の行財政改革は、関係がないわけではありませんが、直接的な関係があるというわけではありません。

以上